

コノリ遺跡

—第3次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第728集

2002

福岡市教育委員会

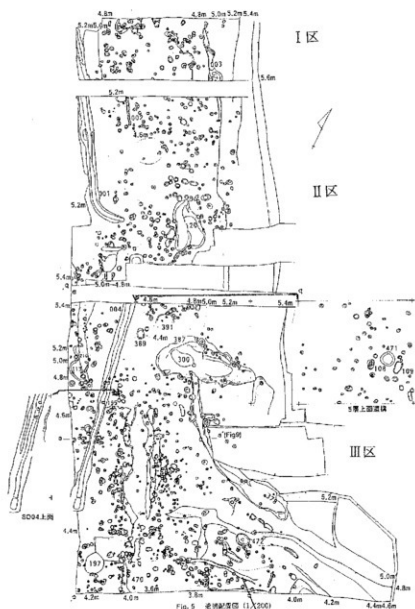
「コノリ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第728集 正誤表

誤 正

2頁 Fig.2 キャプション 11 橋本一丁目遺跡 11 橋本一丁目遺跡

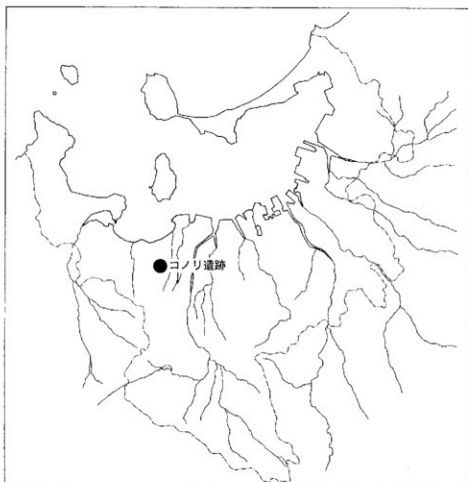
18頁 20行 SX470 SX470(Fig.17)

4頁 Fig.5 区名称、遺構番号で抜けているものがある。下記の通り。



コノリ遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第728集



コノリ遺跡3次

調査番号 9839

遺跡番号 KNR3

2002

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成10年度に実施した、西区拾六町住宅建て替えに伴うコノリ遺跡3次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの意を表します。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生 田 征 生

例 言

1. 本章は市営拾六町住宅立替に伴い平成10年10月19日から同年12月28日に発掘調査を実施したコノリ遺跡第3次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6°21′西偏する。
3. 本吉に使用した遺構、遺物の実測、製図、写真撮影は担当者の他、山田ヤス子（遺構実測）、阿部奈之、秋山美希代（製図）が行った。
4. 本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、中原高美の協力を得た。
5. 本章の執筆、編集は担当者が行った。
6. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

調査番号	9839	遺跡略号	KNR 3	分布地図番号	104
調査地地籍	福岡市西区拾六町岡地内			事前審査番号	9-1-2076
申請地面積	5000㎡	調査対象面積	5000㎡	調査実施面積	1500㎡
調査期間	平成10年(1998)10月19日～12月28日				

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 立地と周辺の調査	1
III. 調査の記録	
1. 調査の概要と層序	5
2. 遺構と遺物	5
(1) 溝	5
(2) 土坑	7
(3) 井戸	12
(4) 土器散布	13
(5) ビット	13
(6) 包含層およびその他の遺物	17
(7) 製鉄関連遺構	18
IV. おわりに	19

挿図目次

Fig.1 周辺の遺跡 (1/25000)	2
Fig.2 周辺の地形:明治23年 (1/8000)	2
Fig.3 周辺の遺跡 (1/8000)	3
Fig.4 調査地点の位置 (1/2000)	3
Fig.5 遺構配置図 (1/200)	4
Fig.6 土層実測図 (1/80)	6
Fig.7 溝出土遺物実測図 (1/3、4)	8
Fig.8 遺構実測図1 (1/40、60)	9
Fig.9 遺構実測図2 (1/40、60、80)	10

Fig.10 遺構出土遺物実測図1 (1/3、4).....	11
Fig.11 遺構出土遺物実測図2 (1/3).....	12
Fig.12 ビット出土遺物実測図 (1/3).....	13
Fig.13 包含層およびその他の出土遺物実測図1 (1/3).....	14
Fig.14 包含層およびその他の出土遺物実測図2 (1/4、3、2).....	15
Fig.15 包含層およびその他の出土遺物実測図3 (1/1、2、3).....	16
Fig.16 包含層およびその他の出土遺物実測図4 (1/3).....	17
Fig.17 製鉄関連遺構実測図 (1/40).....	18

図版目次

(1) 調査区全景とコノリ池 (南から).....	19
(2) 調査区全景 (北から).....	20
(3) III区全景 (北西から).....	20
(4) III区全景 (西から).....	21
(5) II区全景 (西から).....	21
(6) S D 04 (北から).....	21
(7) S K 472 (南から).....	21
(8) S K 300 (西から).....	21
(9) S K 109 (東から).....	21
(10) S K 300 (北西から).....	22
(11) S E 197 (東から).....	22
(12) S E 197 (東から).....	22
(13) S X 195 (南から).....	22
(14) S X 378 (南から).....	22
(15) III区作業風景 (南から).....	22

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成10年8月10日福岡市土木局作環境整備部住宅計画課は西区拾六町団地内の拾六町住宅の建替を計画し、当該地について埋蔵文化財の有無確認の依頼を教育委員会埋蔵文化財課に出した。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるコノリB製鉄遺跡に隣接するため、10年9月30日に試掘調査を行い、中世、古代を中心とした遺構と遺物を確認した。以後建替建設課と埋蔵文化財課の間で協議を行い、諸事情から本調査を避けられないとの結論に至り、平成10年10月19日から同年12月28日まで発掘調査を実施した。

2. 調査の組織

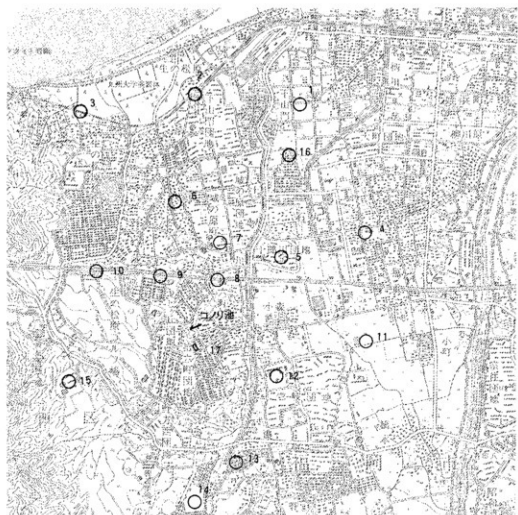
事業主体 福岡市建設局建替建設課
調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
課長 柳田純孝(前任)、山崎純男
第1係長 二宮忠司(前任)、山口譲治
調査担当 池田祐司
発掘作業 一宮義幸 岩見敏子 牛尾奥志輔 海津宏子 川島ツキエ 倉光政彦 税所通泰
島田洋子 高橋茂子 長島光儀 中區登美子 土生ヒサヨ 土生ヨシ子 広瀬梓
細川友喜 満田雅子 山田ヤス子

II 立地と周辺の調査

調査地点は、早良平野の北西、叶岳から北東に広がる丘陵の東側裾部に位置する。現況は平地であるが、これは昭和30年代の拾六町団地造成時の削平埋め立てによりものである。造成前は、Fig. 2のように調査地点から北東側に延びる幅90m、長さ250m、比高差10mほどの丘陵があり、現在も残る西側の丘陵とに挟まれた鞍部を形成していた。また、北側には鉄滓散布地で知られるコノリ池を頭とする狭い谷が北東に延び、南側にはやや広い谷が南西側から広がる。調査地点はこれらの谷の間の谷頭状の高まり部分に相当する。

拾六町団地は北側の丘陵を削平した部分と、南側の谷を埋め立てた部分からなり、この谷を巡る丘陵からその裾に遺構、遺物が確認されている。1973年には、コノリA古墳群、コノリB古墳群が日本大学によって調査され、古墳8基、住居跡、古墳時代後期の製鉄炉6基、押型文土器等が検出されているが、報告書が未刊で詳細は不明である。1986年には老妓公民館建設に伴う調査が行われ、奈良時代の標建柱建物4棟、弥生土器等が出土している。この調査地点は先にあれた谷の南側丘陵上に位置する。当時の遺跡分布地図の遺跡の範囲外であったため、谷を巡る丘陵全域をコノリ遺跡とし、古墳の調査を含めた拾六町コノリ遺跡2次調査として、報告がなされている。〔「西区拾六町コノリ遺跡第2次『福岡市公民館建設関係埋蔵文化財調査報告書』1987福岡市埋蔵文化財調査報告書第162集〕しかし、1994年に発行された遺跡分布地図ではこの調査地点について、コノリC遺跡と登録され、現在に至っている。

さて今回の調査地点は、分布地図ではコノリB製鉄遺跡の一部およびその南側の隣接地である。コノリ池周辺は鉄滓分布地として知られ、池の北側がコノリA製鉄遺跡、南側がB製鉄遺跡と登録されている。そして、これとは別にコノリA、B遺跡があり、現在は宅地造成により削平を受け、そ



- 1 下山門乙女田遺跡
- 2 下山門遺跡
- 3 生の松原遺跡
- 4 拾六町平田遺跡
- 5 石丸古川遺跡
- 6 城ノ原遺跡
- 7 拾六町ツヅジ遺跡
- 8 湯納遺跡
- 9 宮ノ前遺跡
- 10 大又遺跡
- 11 橋本一丁目遺跡
- 12 半多山遺跡
- 13 野方久保遺跡
- 14 野方中原遺跡
- 15 広石古墳
- 16 下山門鞍馬遺跡
- 17 コノリ池跡
第3次調査地点

Fig. 1 周辺の遺跡 (1/25000)

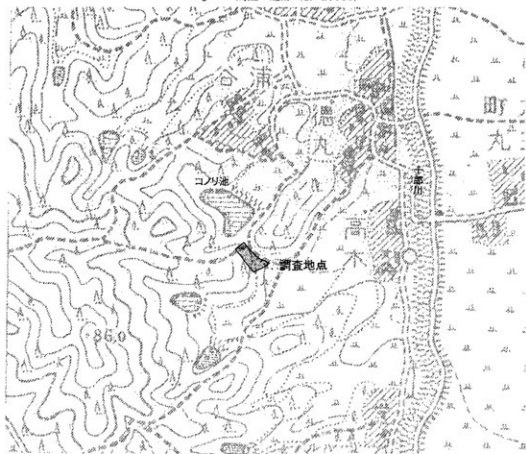


Fig. 2 周辺の地形:明治23年 (1/8000)

の実体は失われている。遺跡の遺存が予想されるのは丘陵裾部から谷にかけての埋め立て地が中心で、しかも現在の遺跡範囲外に広がることは確実である。また、「製鉄遺跡」のように遺跡名に特定の性格、内容を付すことは、時期、性格の異なる遺構遺物が複合的に確認できることが一般的であり不都合が多い。以上の点から、1987年の報告書の見解を継承し、コノリ池から南側の谷とそれを巡る丘陵全域をコノリ遺跡としてとらえたい。そして、今回の調査地点はその3次調査である。



Fig. 3 周辺の遺跡 (1/8000) (Fig. 2と同じ位置)



Fig. 4 調査地点の位置 (1/2000)



Fig.5 遺構配置図 (1/200)

Ⅲ 調査の記録

1. 調査の概要と層序

調査地点は立地の項で記したように、西側の丘陵と東側にかけて存在した丘陵との間の谷状の部分
が主体をしめる。調査対象地の東側2/3は丘陵が削平された部分で、表土直下で花崗岩バイラン土
となり、遺構は確認できなかった。このため西側の谷部のみに調査区を設定した。

調査区は谷部とはほぼ一致する。調査は遺構面まで重機で下げることから開始した。この際、2カ所
に東西方向の土層観察用畦を残し、この畦で区切られた調査区を北からⅠ、Ⅱ、Ⅲ区とした。Ⅰ区か
らには30mでコノリ池である。

調査地点の層序は大きく7層に分けた。1層は昭和の客土である花崗岩バイラン土(Ⅰa)と旧表土
で根、葉等の有機質を多く含んだ黒色の粘質土(Ⅰb)である。Ⅰb層上面には細い竹が倒れた状態で
散乱していた。2層はやや粘質をおびた灰色土で4、50cmほどが2、3層に細分できる。Ⅲ区南壁
土層では水平堆積をし、水田耕作上と考えられる。3層は粘質をおびた茶褐色土で弥生土器および須
恵器を中心とした遺物が出土した。この層の上面からSD04が確認できたが、一部を除いて重機で
除去した。4層は青灰色の粘質土で酸化すると黄茶色に変化する。3層と同様に弥生土器、須恵器が
出土する。5層は調査区東側のⅢ区北側に広がる灰色から暗茶褐色土で須恵器を含み、この上面で遺
構を確認した。6層は淡黄褐色粘質土で上部に弥生土器を含む。7層は花崗岩バイラン土で東岸で確
認できる。

調査はⅢ区のSD04を中心とした一部を3層上面から、Ⅲ区東岸の5層が広がる部分ではその上
面から調査を行った他は、遺物を多く含むⅢ区の谷底部で4層を一部残した他は5層上面および6層
上面まで重機で下げた。

遺構面は谷の底の部分でⅡ区が最も高く、Ⅰ区へは若干下がる程度であるが、Ⅲ区へは比較的傾斜
を持っており、南端との比高差1mを測る。また、調査区南東は、谷の肩が東に広がり、南側の広い
谷の北側の肩となっている。西側はⅠ、Ⅱ区では急傾斜で上がっており谷の肩には至っていない。現
況では調査区西に5m道路を挟んで急な斜面となり、この斜面に直接谷底からの立ち上がりが緩くと
考えられる。

検出した遺構は溝、土坑、井戸、ピット、製鉄関連遺構等である。溝は近世のSD01、15世紀代
と考えられるSD04が顕著なものとしてあげられる。土坑はⅢ区を中心に確認した。ピットは調査
区全体に広がるが、Ⅰ、Ⅱ区のものとは明確ではない。土坑、ピットの時期は15世紀代の遺物が出土
するものはその時期と考えられるが、弥生土器が出土するものについては、遺構の時期を表している
とは必ずしも言えない。Ⅲ区のものには6世紀から8世紀のものが多いと考えられる。製鉄関連では鉄
滓、炉壁がやや集中して出土する部分はあるが明確には炉を確認できなかった。ただし、Ⅲ区の谷底
を中心に鉄滓がコンテナケース8箱ほど出している。遺物包含層は4層で6世紀および8世紀代の
遺物が多く出た。

2. 遺構と遺物

(1) 溝

SD01 (Fig.5、7) Ⅰ、Ⅱ区の西岸を南北に走る溝で幅約80cm、深さ70cmの断面U字形を早す。
覆土は淡茶褐色砂質土である。Ⅱ区で谷底の東側に曲がる。遺構掘り込み面より下げたためその先は

確認できていない。底は南に傾斜している。

出土遺物 (Fig.7) 弥生土器、須恵器が最も多いが、近世の陶磁器を出土し、時期は近世である。1から4が出土した。

SD02 (Fig.5) I区の北側にわずかに検出した幅20cm、深さ20cmの溝で、黄褐色土を覆土とする。遺物は土器小片が出土したのみである。

SD03 (Fig.5) 1、II区の東岸沿いの溝で幅30cmから50cm、深さ10cmを測る。黄褐色土を覆土とし、弥生土器の小片が出土している。

SD04 (Fig.5、6) II区南端からIII区にN-10°-Wに走る溝でIII区際で立ち上がる。3層上面で確認した。ただしIII区で確認した南側10mを除いては4層上面から調査を行っている。幅90cm、深さ50cmほどの断面逆台形の溝で、灰褐色粘質土を覆土とし、底はかなり粘質の強い暗褐色土が堆積する。底面は南側に傾斜し、20cmの比高差がある。SD01とは覆土、遺物の時期が異なり、別のものである。遺物は底付近からの出土が多く、15世紀代でおさまる。

出土遺物 (Fig.7) 5は明代の染め付け、6は糸切り底の土師皿で復元口径11.8cmを測る。7、8は土鍋で7は器面が荒れ、8は外面に煤が多く付着する。9、10は瓦質のすり鉢である。12は陶器で備前系のすり鉢と考えられる。13は砂岩製の砥石で4面を使用。14は滑石製の石鏝で150gを測る。15は滑石製の磨石である。16、17は砂岩製の石臼である。

SD178 (Fig.5) III区南端で東西に走る溝で幅30cm、深さ10cmを測り、茶褐色土を覆土とする。須恵器の小片が出土している。

(2) 土坑

遺構の中で、やや大きめの堀方を持つものを土坑として一括し報告する。

SK108 (Fig.8) III区東岸の5層上面で検出した。平面楕円形を呈し、84cm×34cmを測る。北側にピット状の掘り込みがある。茶褐色粘質土を覆土とし、一部焼土が混じりなくたまる。

出土遺物 (Fig.10) 18は糸切り底の土師皿で1/4からの復元径6.9cmを測る。19は土鍋で外面に煤がわずかに付着する。このほか伊賀片が出土している。

SK109 (Fig.8) III区東岸の5層上面で検出した。平面楕円形を呈し、106cm×57cmを測る。黄茶褐色土を覆土とする。遺物は土器の小片と、灰燐片が出土している。

SK113 (Fig.8) III区西岸で検出した。半円形を呈し谷に切られる形になる。200cm×105cmを測る。茶褐色粘質土を覆土とする。須恵器の小片および土器片が出土している。

SK120 (Fig.8) II区東岸側で検出した。不整形を呈し、154cm×87cmを測る。黄褐色粘質土を覆土とするが堀方ははっきりしない。

出土遺物 (Fig.10) 土器の小片が多く、弥生時代後期に収まるものと考えられる。20は高坏で砂粒を多く含む。21は断面レンズ状の甕の底部と考えられる。

SK216 (Fig.8) III区西岸で検出した。平面半円形を呈し谷に切られる形になる。112cm×50cmを測る。茶褐色土を覆土とする。遺物は土器小片が出土したのみである。

SK300、301 (Fig.9) III区東岸で検出した大型の土坑である。斜面の方向に幅の断面U字形の窪みが谷状に落ちる。確認した延長は9mで上部と下部の堆積土の違いからそれぞれ300と301とした。301は砂質の強い灰色土、暗褐色土を覆土とし、300は粘質の灰色、黒色土を覆土とする。301部分では、花崗岩パイランドを底、壁とするものの、300部分では下層と区別が付かず、底を確認しきれない。6層以下では遺物の出土がごくわずかになり、6層下面が底であった可能性がある。

出土遺物 (Fig.10) 30、31は須恵器の坏でSK300の5または6層の出土である。32は須恵器

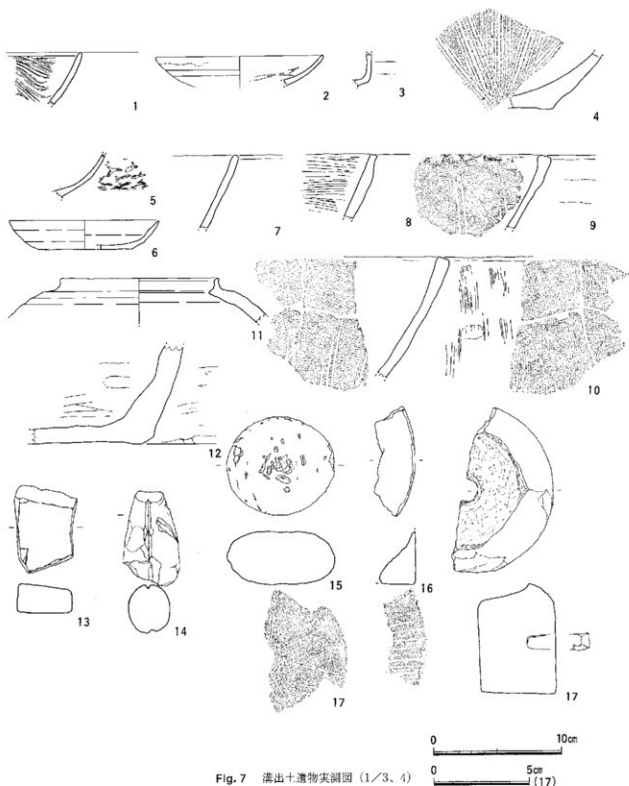


Fig. 7 溝出土遺物実測図 (1/3, 4)

で甕の口縁部で頸部にへら状工具の押圧による文様が付される。33は土師質の土器で器面荒れのため詳細不明。34は瓦質のすり鉢で防長系とされるものである。35は滑石製品で紡錘車である。

SK389 (Fig. 8) Ⅲ区北側中央で検出した。隅丸方形形し、88cm×64cmを測る。黄茶褐色粘質土を覆土とする。

出土遺物 (Fig. 11) 39は小型で尖底の鉢状を呈す土器で、外面に指押さえ痕、内面に刷毛目が見られる。細砂粒を非常に多く含む。1/4からの復元口径11cmを測る。40は須恵器の蓋である。

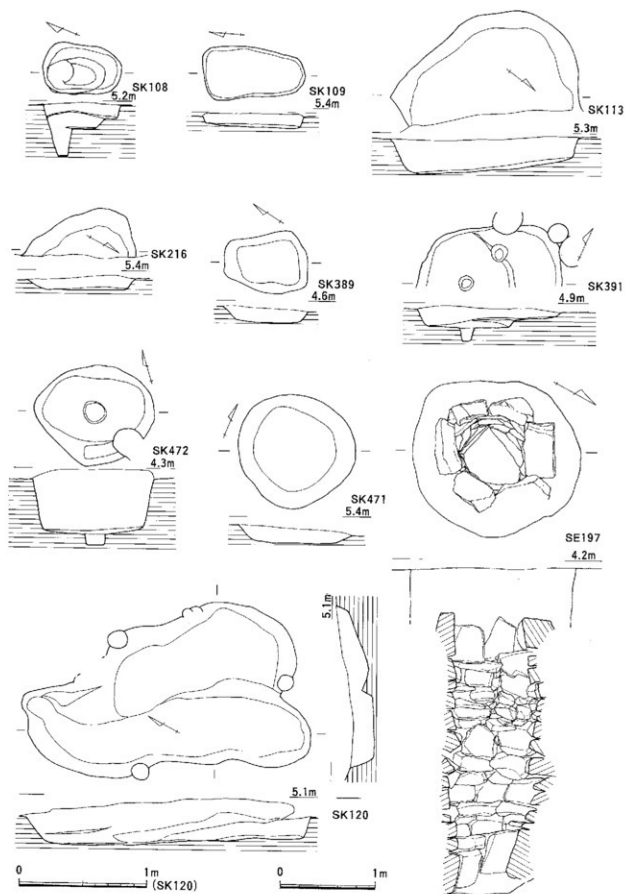


Fig. 8 温梯実測図 (1/40, 60)

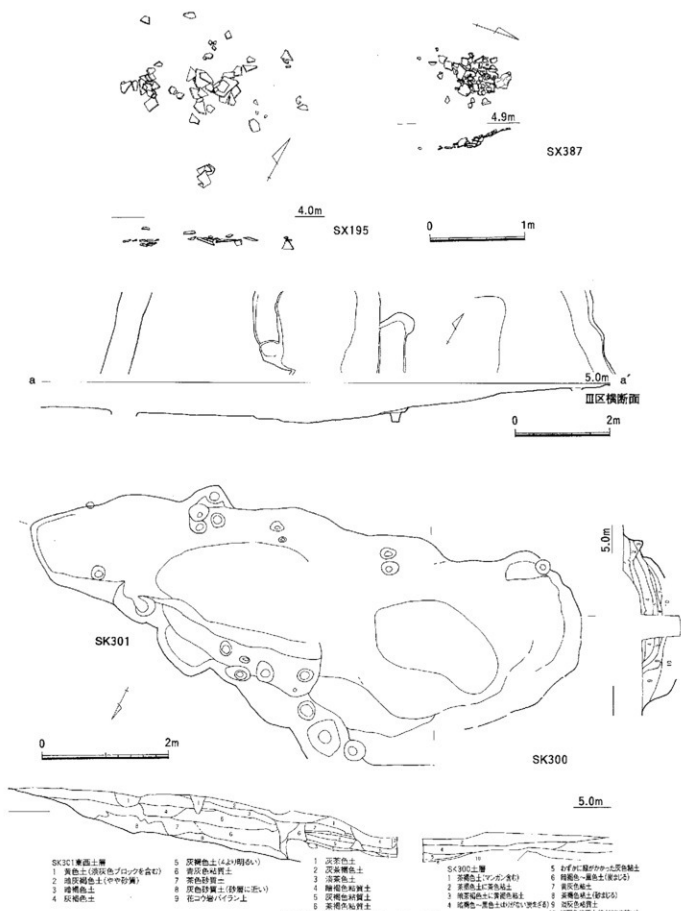
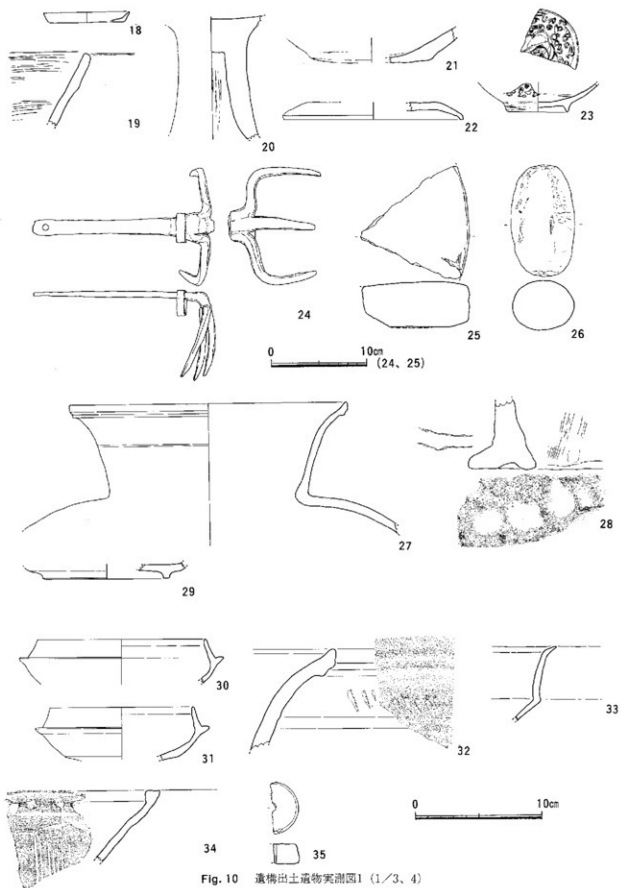


Fig. 9 遺構実測図2 (1/40, 60, 80)



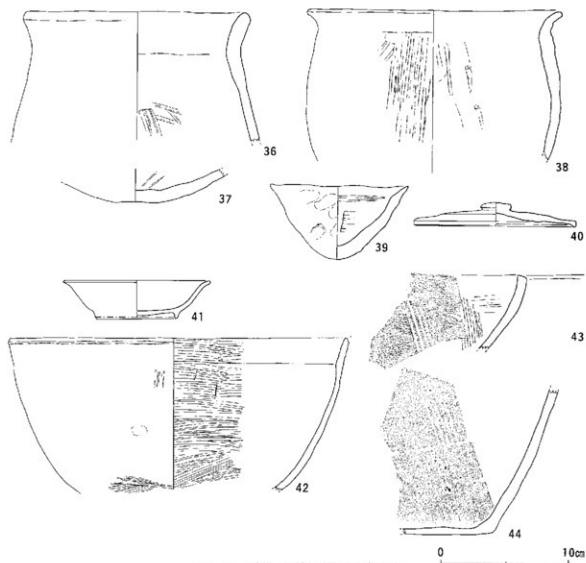


Fig. 11 遺構出土遺物実測図2 (1/3)

SK391 (Fig. 8) Ⅲ区北側中央で検出した。トレンチが南半を破壊し、確認できたのは平面半円形で154cm×65cmを測る。黄茶色粘質土覆土とする。遺物は弥生土器と思われる小片の他に鉄滓が出土している。

SK472 (Fig. 8) Ⅲ区南東側の斜面の花崗岩バイラン土上面で検出した。平面楕円形を呈し、128cm×57cmを測る。中央に浅いビット状の掘り込みがある。花崗岩バイラン土に近い茶褐色土を覆土とし、他のどの遺構とも異なり、遺物は出土していない。落とし穴状遺構に類似する。

SK378 (Fig. 5) Ⅲ区南東の東岸上部に位置する段状の窪みで、土坑とするには難がある。花崗岩のバイラン土を約30cmほど掘り込み幅2.2m程の段をつくる。覆土は灰茶褐色土である。

出土遺物 (Fig. 11) 41は明代の白鐵皿類で一部欠けるがほぼ完形に復元できた。42は土鍋で外面に煤が付着する。43、44は瓦質のすり鉢で同一個体の可能性がある。須恵器と弥生土器の小片が出土している。

③ 井戸 (Fig. 8)

Ⅲ区南西隅でSE197を検出した。直径1.8mの円形を呈し、検出面より50cmほどから下は石組み

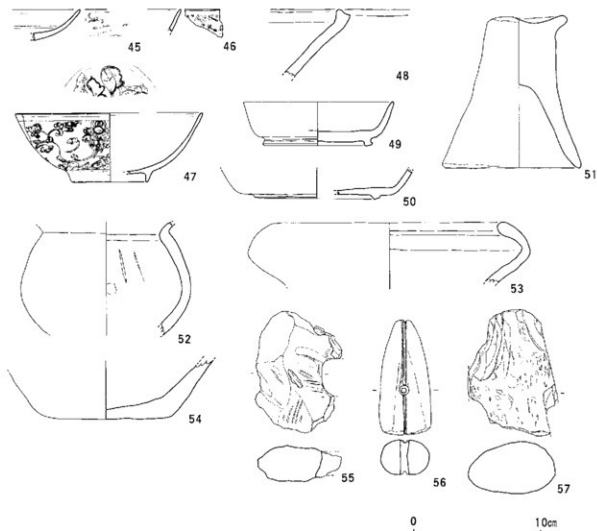


Fig. 12 ピット出土遺物実測図(1/3)

で、内径70cm、深さ290cmを測る。右は厚さ20cmほどの角石を使用し、最下段には5、60cm大の大型のものを使用している。覆土は灰色から青灰色の粘質土を主体とする。遺物は少ない。

出土遺物（Fig.10）22は須恵器の蓋。23は明代の染め付けで、出土遺物の中で最も新しく、遺構の時期に近いと考えている。24は鉄製の三叉鎌（雁爪）で出土時にはわずかに木製の柄が残っていた。25は玄武岩製品で円形になるとすれば径30cmに復元できる。平面を磨っており、敲打痕が見られる。26は玄武岩製品で全面を磨っているが顕著ではなく、敲打痕が残る。

(4) 土器散布

SX195 (Fig.9) III区中央部の4層中に同一個体と考えられる須恵器の甕が集中して散布していた。

出土遺物（Fig.10）27は須恵器の甕で内外面になで調整を施し、胸部から頸部の屈曲部下に向ってと当て具痕が見られる。破片は多いが接合せず、復元的に図化した。28は甕等の底部か。底に圧痕による文様が見られる。29は須恵器の坏である。

SX378 (Fig.9) SK300上で岡のように北側から南側に傾斜した状態で土師質の土器片がまとめて出土した。SK300に流れ込んだ状態を示す可能性が高い。

出土遺物（Fig.11）36、38の少なくとも2個体の甕が含まれる。破片は多いが小さく摩滅しているため全体を復元できない。37は36の底部と考えられる。

(5) ピット

ピットは調査区全体に分布する。I、II区のもは淡黄褐色粘質土を覆土とするものがほとんどで

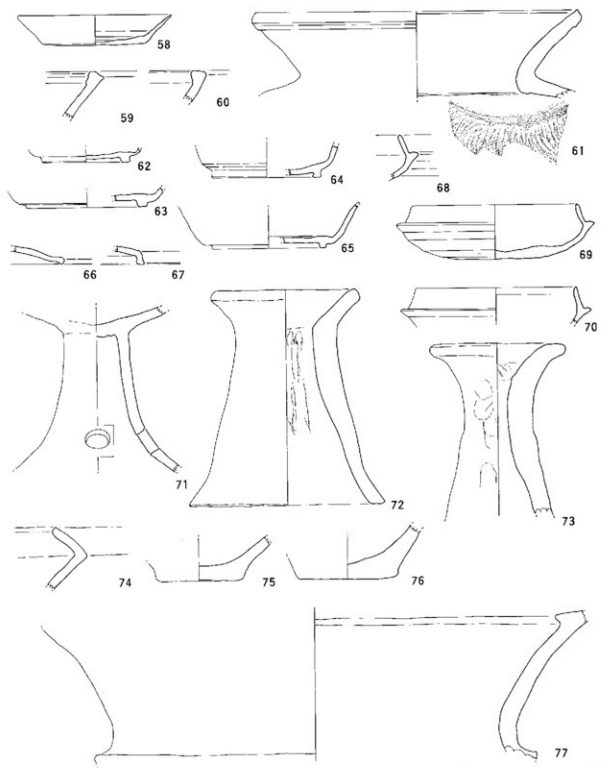


Fig. 13 包含層およびその他の出土遺物実測図1 (1/3)

0 10cm

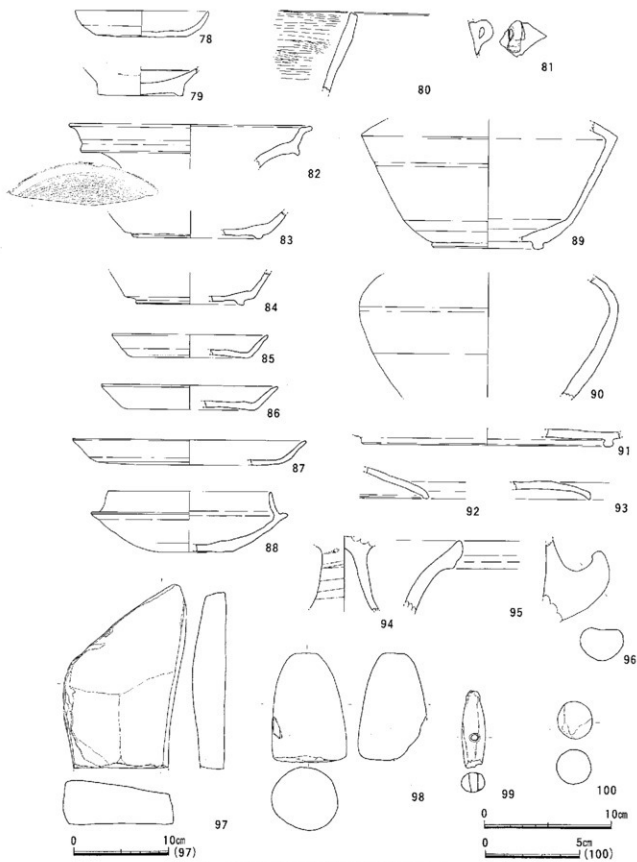


Fig. 14 包含層およびその他の出土遺物実測図2 (1/4, 3, 2)

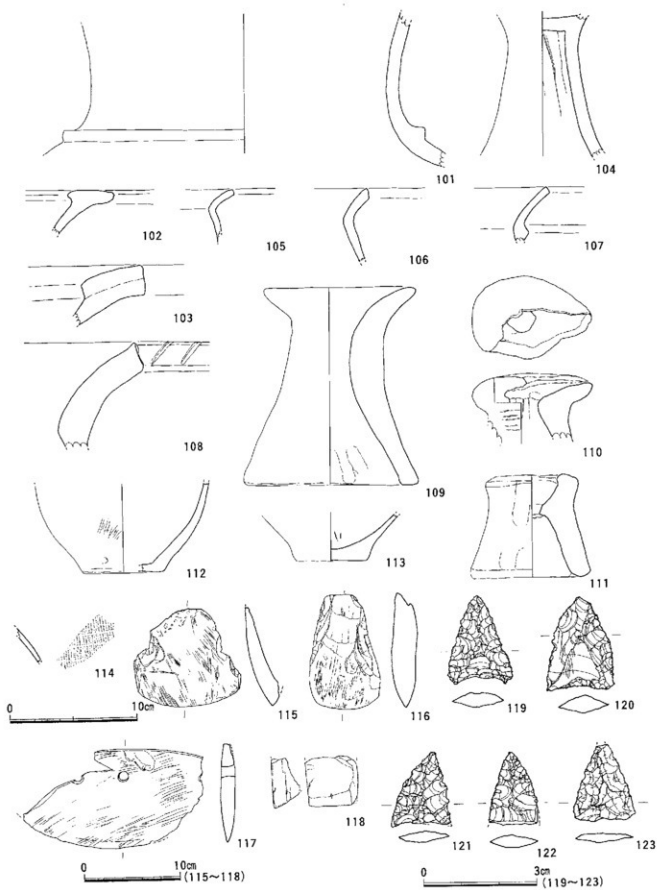


Fig. 15 包合層およびその他の出土遺物実測図3 (1/1、2、3)

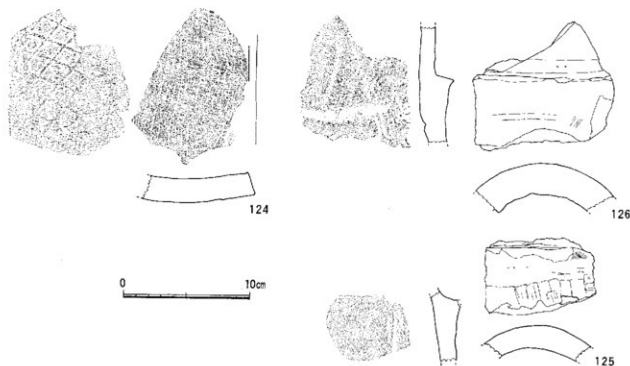


Fig. 16 包含層およびその他の出土遺物実測図4 (1/3)

弥生土器、須恵器等が出土するが小片である。Ⅲ区では淡茶色土、灰茶色砂質土を覆土とするものが有り、後者には15世紀代の遺物を出土するものがある。いずれも建物を想定できるものはない。

出土遺物 (Fig.12) 45は伊万里系の染め付け、46、47は明代の染め付けである。48は瓦質のすり鉢で防長系と言われているもの。49、50は須恵器の坏である。51から54は弥生後期の土器である。55、56は滑石製の鍾で、55は径3cmほどの孔を施し、片面に加工痕がある他は自然面を利用する。56は全体を加工し、中央に径7mmほどの穿孔を施し、長軸方向中央に下面を除いて溝を穿つ。57は玄武岩製の石斧の基部で先端半分は欠損し、器面には敲打痕が残る。

(6) 包含層およびその他の遺物 (Fig.13~16)

58から77はⅢ区中央の谷底部の4層に相当する部分からの出土である。58は土師器の皿で底は糸切りによると考えられ、1/3からの復元口径11.1cmを測る。59、60は瓦質のすり鉢で防長系とされるものである。61から70は須恵器である。61は甕で胴部内面に当て具痕を残す他はなで調整で仕上げ。62から65は高台付き坏、66、67は蓋で8世紀代。68から70は坏身で6世紀後半のものと考えられる。71から77は弥生土器である。71は高坏で1カ所に穿孔する。72、73は器台、74は複合口径の後期の甕の口径、75、76はレンズ底気味の底部、77は中期の壺である。

78から126は本来の層、遺構から明らかに遊離したものである。78は糸切り底の土師皿で1/3からの復元口径10.6cmを測る。79は白磁の底部。80は土鍋で外面に煤が付着する。81は陶器で壺の耳の



Fig. 17 製鉄関連遺構実測図 (1/40)

部分である。82から95は須恵器である。82は壺口壺で頸部に板状工具の木口による浅い圧痕を施しオリーブ色を呈す。83、84は高台付きき杯、85から87は皿、88はⅢb期の坏身、89、90は壺、91は盤、92、93は蓋、94は高坏、95は甕と考えられる。96は土師器の取手である。97は砂岩製の砥石で、両平向と側面の片方をよく使用している。98は滑石製品で磨石と考えられる。99は滑石製の錘で中央に穿孔する。100は土製の玉で砂粒を含まない精良な胎土である。101から113は弥生土器である。101、102は中期の壺の頸部と口縁部、103は中期初頭の甕棺の口縁部と考えられる。104は高坏の脚部、105から107は甕の口縁部で後期のものである。108は終末期の甕棺または大型甕の口縁部、109は器台、110、111は支脚である。112は壺、113は甕の底部である。114は縄唐文を施す土器で外面灰色、内面淡橙色を呈す。115は頁岩、116は細粒砂岩製の磨製石斧である。117は擬灰岩製の石包丁で2つの孔を施す。118は粘板岩製の片刃石斧と考えられる。119から123は石鏃で123が古銅輝石安山岩製である他は黒曜石製である。120は裏面に主刺維面を残し、122は尖頭器になる可能性がある。124から126は須恵質の瓦で、いずれも内面に布目圧痕が残る。124は平瓦で外面に叩き痕が残る。125、126は丸瓦で外面になで調整を施す。

(7) 製鉄関連遺構 (Fig. 17)

調査区内では総量42kgの鉄滓が出土した。I区、II区はピットそれぞれ4、8基から少量が出土したのみで、ほとんどがⅢ区からの出土である。ピット、土坑からの出土もあるが、多くは谷底の包含層、段落ちでSD01、04、SE197からも多く出土している。谷底の4層下は鉄分の沈着が著しく、黄茶褐色を呈すほどである。しかし、明確に製鉄遺構と判断できるものはなく、調査区南端で鉄滓が集中したSX470にその可能性がある程度である。

SX470は2.8×0.8mの範囲に鉄滓が広がり、その北側の一方所に焼土と炭がまとまる部分があり、炉の残骸の様相を呈している。その範囲は径30cmほどが復原できる。周辺には鉄滓が散らばり、そのほとんどが精錬炉のものと考えられる炉壁である。周囲の土を洗浄したが、鉄滓が少量出土したのみである。地の土に入っていたものと考えられる。

調査区全体でも精錬炉の炉壁の出土が多い。炉壁はササと粗砂を多く混入した粘土で築かれている。炉底滓と考えられるものはあるが少ない。鍛冶滓は少量であるが、集中して出土する部分があり、SK195付近で鍛冶滓のみがまとまって4.2kgが出土した。また、羽口は出土していない。周辺に精錬炉が存在するのは確実であろうが、不明である。ただし、廃滓場にしては鉄滓の量は少ない。炉が丘陵裾部にあるとすれば少し離れた位置にあると考えられる。時期は、4層下からは15世紀代

の遺物が若干出土しているが、SX195等の出土状態からピット等によるまじり込みと考えられ、須恵器等の出土遺物から、8世紀後半代が主と考えられる。

Ⅳおわりに

今回の調査では縄文時代から中世末までの遺構、遺物を検出した。

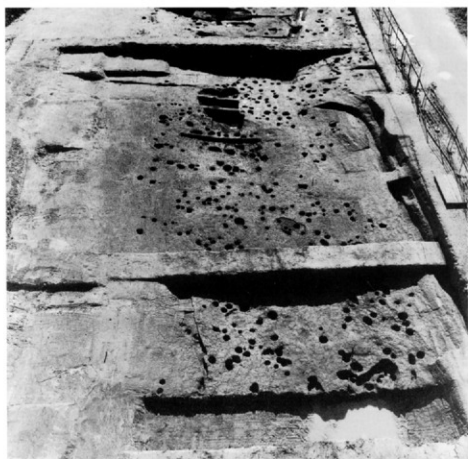
縄文時代では、落とし穴状の遺構と石鎌、石斧があげられる。落とし穴状の遺構SK472は遺物が出土しておらず時期を決めることはできないが、埋土が他の遺構と異なり、異なる環境または時期に埋没したと考えられる。115、116の石斧が縄文時代と考えられ、石鎌の中で縄文期のものがあるのは確実である。122が尖頭器の可能性が高いことにも留意しておきたい。弥生時代は中期、後期の土器、石包丁、片刃石斧が出土した。ピットには弥生時代の遺物を出土するものがあるが、時期を特定することは難しい。古墳時代は6世紀の須恵器が出土している。次の8世紀の遺物が最も多く、ピット、土坑もこの時期の物が多いと考えられる。先に記したように鉄滓も8世紀代と考えられるが、炉自体は確認できなかった。次に顕著なのは15世紀後半から16世紀の遺構遺物で、SE197や、明代の染め付けなどがあげられる。

全体に周辺からの流れ込み的な遺物が多く、集落、製鉄炉等の遺構はごく近い周辺の丘陵上、裾部に拡がると考えられる。ただし、丘陵上のほとんどは、これまでの造成で削平を受けており残っていない。

今後丘陵裾部、谷部の調査、未報告の古墳群・製鉄跡の本報告に期待したい。



(1)調査区全景とコノリ池（南から）



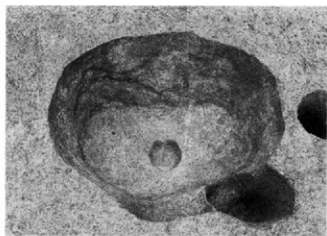
(2)調査区全景（北から）



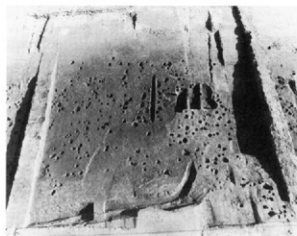
(3)Ⅲ区全景（北西から）



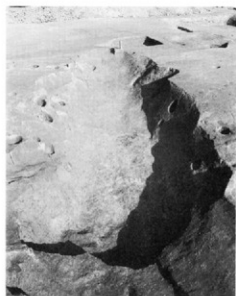
(4) III区全景 (西から)



(7) S K 472 (南から)



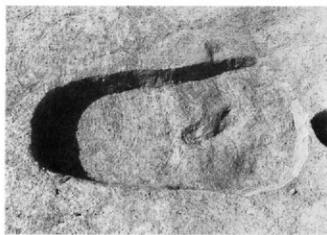
(5) II区全景 (西から)



(8) S K 300 (西から)



(6) S D 04 (北から)



(9) S K 109(東から)



(Ⅱ) SK300 (北西から)



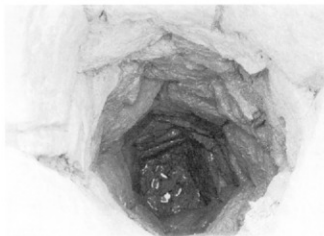
(Ⅱ) SX195 (南から)



(Ⅱ) SE197 (東から)



(Ⅱ) SX378 (南から)



(Ⅱ) SE197 (東から)



(Ⅱ) Ⅲ区作業風景 (南から)

コノリ遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第728集

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 下川印刷有限会社
福岡市東区郷口町8番27号
(092) 623-5751
